

書店にふれる

松本 秀昭

書店を「利用」するのはどんなときだろう。定期購読している雑誌や、好きな作家の新刊や文庫本を購入するとき、あるいは話題のベストセラーが気になったときなど、いろいろな目的があるのではないだろうか。だが、目的があるときのみ書店に行くよりも、何の気なしにスマートフォンをのぞくのと同じように、目的もなしにふらっと立ち寄り、店内をぶらぶらするというのが、書店の理想的な使い方だ。

◆なぜ書店に立ち寄るのか

目的もなしに書店に立ち寄るのには利点がある。まず、たとえ中身を読んでいなくとも、いろいろな本の情報にふれていると、講義や教科書や参考文献の内容を理解するのにたいへん役立つ。本にかんする情報さえあれば万能というわけではけっしてないが、それらは大学での学習の質と量を必ず向上させてくれるだろう。

さらに、そうした本の情報を効率よく記憶するには、書店や図書館といったフィジカルな空間で本にふれるのが、もっとも効果的だ。というのも、人の記憶や思考、さらには、課題の発見や問題解決、そしてその過程というものは、頭蓋骨に閉じ込められたコンピュータのような脳でのみ処理されるものではないからだ（ダニエル・C・デネット 2016『心はどこにあるのか』）。身体はもちろんのこと、身体が受け取る知覚や感覚、それにともない生じる感情や想念、そして人がその中で動き回る環境というものは、人の記憶や思考と切り離すことのできない不可欠な要素になっている。それら全体が一続きのシステムとして機能しているときに、記憶や思考もその力をもっともよく発揮するのだ（ルイーズ・バレット 2013『野生の知能』）。

◆本の情報を手に入れる

書店に行く前に下準備として、基本となる本の情報を身につけよう。まずはシラバスや受講した講義の中で、強く興味を抱いた問題やテーマにかんする本から情報収集を始めるのがいいだろう。特定の関心にそった本の知識が増えれば、おのずから他の問題やテーマを扱った本に関しても知識が身につく、関心の幅も広がっていくはずだ。

興味のある問題・テーマを見つけたなら、それに関する教科書やテーマ別の入門書を手掛かりに、基本的な本の知識を集めていこう。専門書を出している出版社の教科書は、情報を収集し始めるさい、最も信頼のおける情報源となる。巻末や関心のある章の最期に載っている、引用・参考文献一覧や参考図書、ブックガイドは情報の宝の山だ。同様に、講義中に先生が言及したり紹介したりする本も貴重な情報である。興味があったなら必ずノートにメモし、できればその日のうちに図書館や書店で実際に手

に取ってみよう。

◆本の見かた

本の情報に接したさい、注目する点が4つある。扱われている「問題やテーマ」「学問領域」「著者名」「タイトル」だ。気をつけてほしいのは、これらを最初からまじめに「頭」で覚えようとはしないことだ。頻繁に本のある空間や本にふれるようにしていれば、自然と本にかんする知識が身につくようになるはずだ。

まずは自分の興味・関心のある「問題やテーマ」から本の知識を広げていこう。そのさいその問題・テーマがどの「学問領域」で扱われているのかを確認しよう。「学問領域」とは、たとえば音楽のたとえならジャンルのようなものだ。シラバスにのっている講座名をそのまま学問領域と考えればよい。人文科学の本のばあい、「哲学」「現代思想」「社会学」のように領域が重なることがあるが、難しく考える必要はない。また、いくつかの講義を受講し、定期テストを受け、単位を取得してからでないと、それぞれの「学問領域」が具体的にどんなものなのかわからないこともある。だから、そういうばあいは「そういうもの」「時間のかかるもの」としてとりあえずは学問領域の呼び名だけ確認し、自分の関心のある問題・テーマと関連付けておけばよい。この「問題・テーマ」「学問領域」が本の知識の記憶のベースになる。

つぎに「問題・テーマ」「学問領域」に関連づけるように「著者名」と「タイトル」を覚えよう。覚えたての著者やタイトルは書店や図書館に立ち寄ったさいに、いつも探すようにするとよい。最初のうちは著者名やタイトルは覚えにくく、すぐに忘れてしまうだろう。しかし、書店や図書館というフィジカルな空間で一度確認しておく、本の「居場所」の強烈な印象が記憶に残る。「タイトルも著者名も忘れてしまったけど、あそこにある」ということを後で思い出せばよい。その経験が、ノートや教科書で、あるいはPCやスマートフォンで検索して確認した時に、さらに記憶を強化するのに役立ち、上述したように何度か書店や図書館に通ううちに自然と思い出せるようになるだろう。

◆本情報を整理する

入手した本の情報は、学問の領域やテーマ、キーワード、また著者と著者の関係といったものを互いに関連づけながら、マップを描くようにまとめていく。たとえば、学問領域をマップ上のある地域と見立てて、扱われている問題やテーマをその上に標識のように立ててみる。そうしたら、著者名を家に見立てて、関連する標識の周りに著者の家を建て、本のタイトルをそこに収めていくといった具合に試してみよう。同じ問題・テーマを扱っている著者の家々が集合し、各々の家は影響関係、師弟関係、対立関係に基づいて並んでいるイメージだ。あくまでイメージなので頭の中で厳密に

思い描ける必要はない。ある一つの本や著者から芋づる式にいろいろな情報が出てくるようになることを目標にしよう。

◆本のある場所の環境の違いについて

本の情報の集め方と整理の仕方を覚えたなら、つぎに本の情報を得る場所の環境の違いについて知っておくとよい。Amazonのようなデジタル書店や、新刊書店および古書店、図書館といったフィジカルな書店や空間、それぞれを環境の違いに応じて使いこなそう。

いつでもどこでもアクセスできる Amazon は、あまり詳しくないテーマや領域にかんしては、効率よく本の情報が得られるのでとても便利だ。しかし、検索を繰り返していると情報がループしてしまい、入手できる情報の広がりには欠ける。レポートや卒論の「ネタ探し」の場所としては、それほど創造性や独創性に貢献してはくれない。

「ネタ探し」として積極的に情報を収集するには、大学図書館が最適だ。視覚に入ってくる情報量は、アマゾンや現実の書店を凌駕する。大学図書館では、書店をぶらつくときよりも意識的に思考を働かせ、ハンターになったかのように感覚を研ぎ澄まそう。思いっきり想像力を働かせて、本を探索する。「この本の議論はあの本の議論に接続できるのでは?」「こんどの近代哲学のレポートで、この科学史の本が使えるのではないか?」などと、創造力が喚起されるだろう。

古書店は、新刊書店や図書館にくらべて、「偶然性」に満ちた空間だ。未知の著者や本が発見できるかもしれない。興味があったり、気になっているテーマの本などを手に入れておくと、のちに予想外に役立ったりする。

新刊書店に関しては、専門書を多く取り扱っている大学構内の書店や大学の近くにある書店に通うようにしよう。専門書が多くない一般的な新刊書店でも「新書」や「学術文庫」の新刊は意識してチェックしておこう。

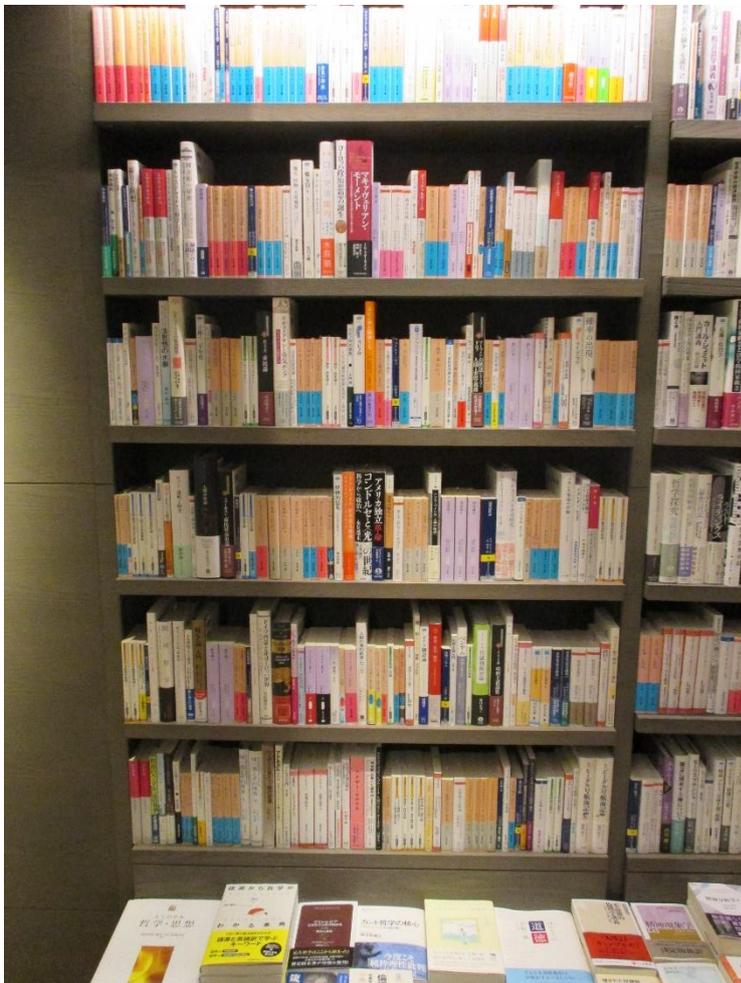
本の知識が増えてくると、「棚を読む」ことができるようになり、それぞれの新刊書店の違いがわかるようになる。どんな意図で本が並べられているのか、あるいはどんな文脈が本の並びでつくられているのか想像しながら棚を眺めてみよう。お気に入りの新刊書店というものがいくつかできるはずだ。

◆「書店にふれる」とは

よくフィジカルな書店に行くと、新しい発見や問題・課題の解決につながるような「ひらめき」を得られると言われている。こうした発見やひらめきは、「セレンディピティ」と呼ばれる。これは、目的や意図のない自由な思考が、思いもよらないアイデア

とアイデアの間に関連性を発見することによって得られる。ただし、ただ書店に行けさえすればそうした幸運にありつけるわけではない。ある程度、書店に通いなれ、本の知識を身につけていることが必要だ。そうすると、店内をただぶらぶらするだけで、本のある空間と棚、本の知識が結びつき、ひとつの思考回路となって、無目的な自由な思考が流れ出すようになる。書店に通う経験を積み重ね、こうした状態を楽しめるようになったときに、セレンディピティは訪れるのだ。

書店へふらっと立ち寄るごとに、本の情報のインプットと記憶の定着がうながされ、思考の自由な流れも、意識しないうちに内容の充実したものになるはずだ。日常生活の中で書店を見つけたなら、さっそく目的がなくてもふらっと立ち寄ってみよう。



本文 P143 写真



本文 P143 写真

【引用文献】

ダニエル・C. デネット. 2016. (土屋俊訳) 『心はどこにあるのか』筑摩書房.

ルイズ・バレット. 2013. (小松淳子訳) 『野生の知能: 裸の脳から、身体・環境とのつながりへ』インターシフト.

【参考文献】

アンディ・クラーク. 2015. (呉羽真・久木田水生・西尾香苗訳) 『生まれながらのサイボーグ: 心・テクノロジー・知能の未来』春秋社.

アントニオ・R・ダマシオ. 2010. (田中三彦訳) 『デカルトの誤り: 情動、理性、人間の脳』筑摩書房.

イーライ・パリサー. 2016. (井口耕二訳) 『フィルターバブル』早川書房.

高野明彦. 2018. 「図書館、未来の書棚、連想」『現代思想 2018年12月号 特集=図書館の未来』青土社.

デイビッド・サックス. 2018. (加藤万里子訳) 『アナログの逆襲: 「ポストデジタル経済」へ、ビジネスや発想はこう変わる』インターシフト.

ニコラス・G・カー. 2015. (篠儀直子) 『オートメーション・バカ: 先端技術がわたしたちにしていること』青土社.